

家族関係からみた 女子高生の大学受験意識

○角田亨子（神奈川大学非常勤講師）
浅田隆夫（筑波大学）

親の年齢、子供の数、専攻、大学受験意識

I. 研究の目的と方法

1) 目的

21世紀を間近に控え、新たなる世界秩序づくりが叫ばれる今日、日本には国際社会化高度情報化、高度技術化と急速な変化があり、人々の生活習慣、環境等が大きく変わってきている。このように急激に変化する社会で、教育の在り方も内外から変革が叫ばれている。これを受けて各大学では、将来の教育研究の在り方を志向した大学づくりが試みられている。このような時期に、人生経験を重ねてきた受験生の親も、悩みや希望を抱きながら大学受験を迎えるであろう。これから自立していく高校生は、より大きな不安を持ちながら親の経験してきた社会と異なる環境の中で、大学受験を考えなければならない。

本研究は、受験生の家族構成と、受験意識に関係が見られるか分析し、将来構想、教育研究の一助としたい。

2) 対象

M学園女子高等学校、3年生330名（文系163名 理系167名）
回収率82.8%（文系80.4%、理系81.4%）
親 263名（文系135名、理系128名）
回収率79.7%（文系82.8%、理系76.6%）

3) 方法

学級担任による説明後、自宅に持ち帰り記入。

4) 集計処理

- ①第一次集計後、第二次集計として、主因子法、バリマックス回転を用い、因子分析を行った。
- ②因子得点及び、相関係数の分析を試みた。
- ③「どんなことを考えて学部、学科を決めますか」（以下、「大学の学部、学科の決定理由」とする）の質問項目について、項目を因子分析し、抽出された因子の因子得点を求め、それぞれ、専攻対各独立度数（志望、親の年齢、子供の数）の2要因分散分析を実施、有意水準の検出を行った。

5) 分析の観点

- ①「大学の学部、学科の決定理由」を5因子に分析する。

以下、因子を示す。

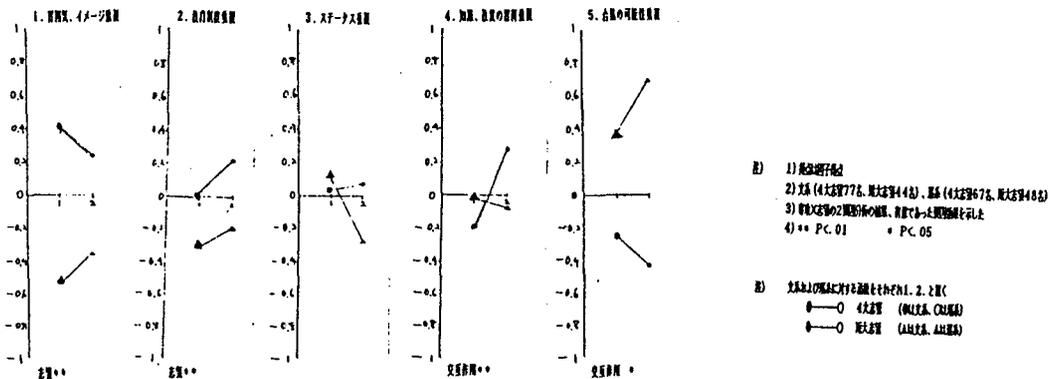
- 因子1. 雰囲気、イメージ重視
- 因子2. 教育制度重視
- 因子3. ステータス重視
- 因子4. 知識、教養の習得重視
- 因子5. 合格可能性の重視

II. 結果および考察

「大学の学部、学科を決める理由」5因子と（表1）専攻、志望、（表2）親の年齢、（表3）子供の数、の関係。

1. 5因子と専攻、志望の関係（表1）について有意な差がみられた項目をとりあげ、分析を行う。

表1 どんなことを考えて大学の学部、学科を決めますか
—4大、短大志望から見た時—



1) 因子1（雰囲気イメージ重視） 志望** $P < .01$

4大志望（文系 0.41、理系 0.23）

短大志望（文系 -0.54、理系 -0.36）

4大志望（文系、理系）はキャンパスが気に入って、大学のカラーに魅かれて、と短大志望（文系、理系）より大学生活のイメージを意識していることがうかがえる。

2) 因子2（教育制度重視） 志望** $P < .01$

4大志望（文系 0.00、理系 0.21）

短大志望（文系 -0.31、理系 -0.20）

4大志望（文系、理系）は良い卒業生がいるから、クラブ活動が盛んだから、と教育内容を意識していることがうかがえる。

3) 因子4（知識、教養の習得重視） 交互作用** $P < .01$

4大志望（文系 -0.20、理系 0.28）

短大志望（文系 -0.02、理系 -0.08）

4大志望（理系）は、資格取得の可能性がある、専門知識を身につける、と自己修養を意識していることがうかがえる。

4) 因子5（合格の可能性重視） 交互作用 * $P < .05$

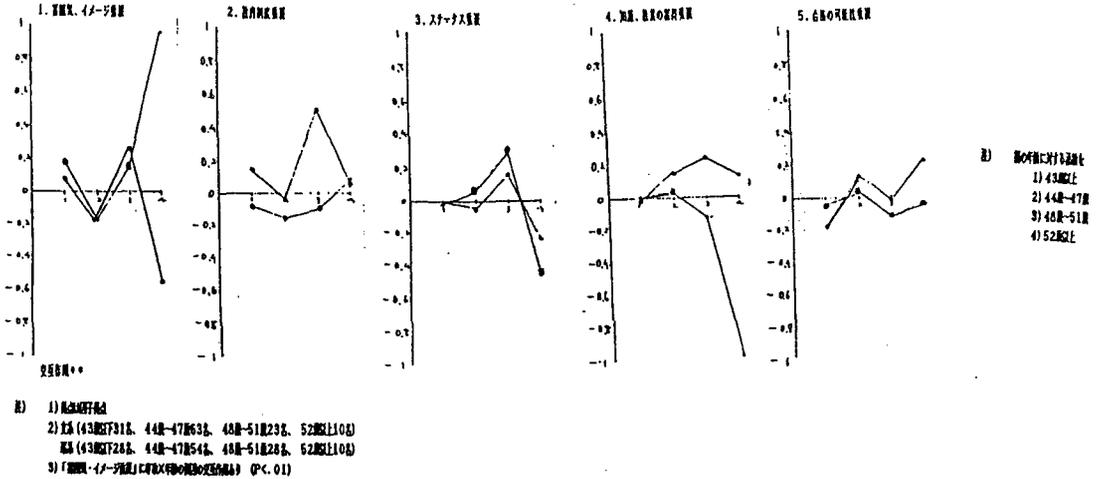
4大志望（文系 -0.27、理系 -0.43）

短大志望（文系 0.37、理系 0.69）

短大志望（文系、理系）は自分の成績と大学の難易ランクから、通学に便利、と入学のための外的条件を非常に意識していることがうかがえる。

2. 5因子と親の年齢の関係(表2)について有意に差がみられた項目をとりあげ、分析を行う。

表2 どんなことを考えて大学の学部、学科を決めますか
—親の年齢から見た時—



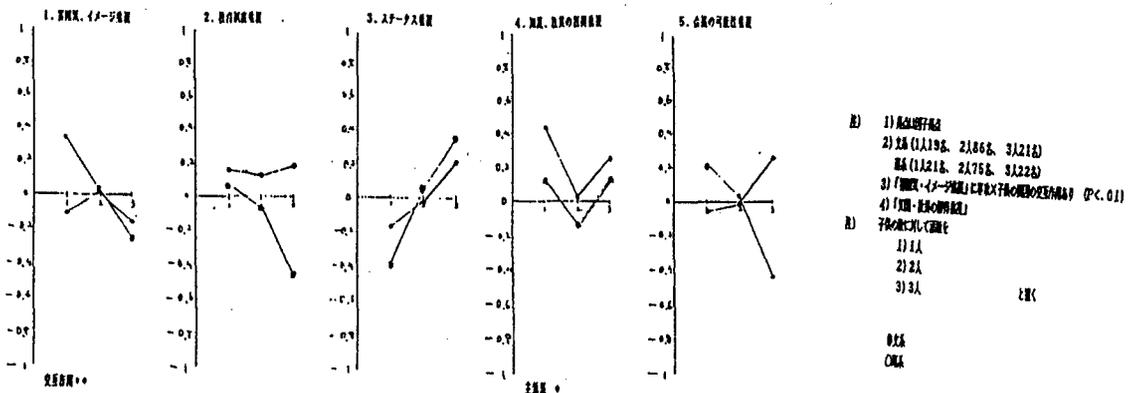
1) 因子1 (雰囲気、イメージ重視) 専攻×年齢の要因の交互作用あり** P<. 01

文系添数 1) 0.18 2) -0.18 3) 0.15 4) 0.95
理系添数 1) 0.08 2) -0.18 3) 0.26 4) -0.53

添数2) (44歳~47歳)は「団塊の世代」でこの世代は、経済、文化、社会にさまざまな影響を与えてきた世代であるが、大学生活のイメージ重視の意識は低く、添数4) (52歳以上)の「戦前生まれ」の親の意識は文系は非常に高く、理系は低いことがうかがえる。

3. 5因子と子供の数の関係(表3)について有意な差が見られた項目をとりあげ、分析を行う。

表3 どんなことを考えて大学の学部、学科を決めますか
—子供の数から見た時—



- 1) 因子1 (雰囲気、イメージ重視) 専攻×子供の要因の交互作用あり ** $P < .01$
 文系添数1) 0.34 2) 0.04 3) -0.26
 理系添数1) -0.11 2) 0.01 3) -0.17

子供1人(文系)は雰囲気、イメージ重視して、学部、学科を選択することがうかがえる。子供3人(文系)は逆に意識は低い。子供1人、2人、3人(理系)は、学生生活が楽しそう、大学のカラーに魅かれて、等の意識が低いものがうかがわれる。

- 2) 因子4 (知識、教養の習得重視) 子供の要因の主効果 ** $P < .01$

文系添数1) 0.12 2) -0.15 3) 0.13
 理系添数1) 0.44 2) 0.02 3) 0.25

子供1人(理系)は、専門知識を身につけたい、生涯打ちこめるものを見い出す、と意識の高いことがうかがえる。

1人、2人、3人とも、文系に対して理系の意識は高く、自己修養を意識して、学部学科を選択することがうかがえる。

Ⅲ. まとめ

- * 親の子供へのおもいは、家族やまわりの人たちと円満に暮らし、心豊かに生活する。学歴は大学、短大を期待する(6~7割に達する)。学歴は就職に有利な条件である。子供の生活にゆとりがない原因は、受験勉強のためである。(国民生活白書より)
- * 親、子供共に受験に対して雰囲気、イメージを考え、知識、教養の習得を意識している。将来、社会人としての教養を身につけ、豊かな人間性を求めている姿が見えてく
- * 子供の自立については、親は子供を一人前の大人として考え、希望を実現させてやりたいと思っはいるが、過度の期待をしない。
 また大学受験は自立へのチャンスである。
- * 高校生は苦しい受験期を過ごすことになると思うが、一つのことに挑戦する以上、努力することは義務であり、責任である。
 一見、暗くネガティブに見えるこの時期も、親と子は共に受験期を過ごすことによって、家族の絆を強め、人間味豊かな生き方を築く礎となるであろう。